



伊達中学校で行っている「全校一斉読書」の取り組みとして、先日みなさんに書いてもらった「私の一行」感想文コンクールの審査結果が出ました。今回は、審査結果の発表と最優秀賞と優秀賞に選ばれた感想文を紹介します。

## 第2回「私の一行」感想文コンクール結果発表

### 最優秀賞

3年1組 小野 将さん(番号⑥)

### 優秀賞

・3年3組 江刺家 ひなのさん(番号⑦) ・2年3組 神田 ゆずねさん(番号⑨)

### 佳作

・1年1組 笹木 惟誠さん(番号①) ・1年2組 武藤 咲季さん(番号⑧)  
・1年2組 木村 ひまりさん(番号④) ・2年2組 伊東 蒼祐さん(番号⑤)  
・2年2組 日戸 咲希さん(番号③) ・3年3組 海老原 和月さん(番号②)



## 最優秀作品・優秀作品紹介

### 最優秀賞 3年1組 小野 将

「警察に捕まってもいいから、この回数券、ぼくにください、と言った。」

少年は、バスの回数券を母が退院するまでのタイムリミットだと考えていた。だから、残り一枚となった回数券は、少年にとつての「希望」であった。そんな「希望」をどうしても使わなくてはならない時、少年はそれを手放したくなくて、泣きじゃくり、駄々をこねたのだろう。そんな母を想う美しい少年の心に強く惹かれ、わたしもそんな心をもちたいと思ったから、この一行を選んだ。

### 優秀賞 3年3組 江刺家 ひなの

「だから、少年はなにも言わない。」

バスの乗客と運転手、という二人の関係は本来、それ以上になることはない。

しかし、この物語では、お母さんのお見舞いを通して二人の間に小さな関係ができた。その関係にどんな名前が付くのかは分からないが、「ただ一つの願いを聞いてくれた。」それは少年にとって大きな意味をもつ。

少年が乗った最後のバスを「いつも通り」降りるため、何も言わなかった少年の行動が、印象に残った一行だった。

### 優秀賞 2年3組 神田 ゆずね

「ごめんなさい、ごめんなさい、と手の甲で目元を覆った。警察に捕まってもいいから、この回数券、ぼくにください、と言った。」

少年はきつと、お母さんに早く退院してほしかったんだと思う。新しく回数券を買おうと、また退院の日が遠ざかってしまうように思えたのだから。文がとぎれとぎれになっているのは、泣きながらも必死に河野さんに訴えているからだ。ここまで勇気を出して話すことができるのはすごいし、母親を待ち続けていた少年だからこそその行動だと思う。だから、私はこの一行を選んだ。